

使徒の働き17章16-21節 「憤りに駆られた宣教」

1A 心の憤り 16-17

1B 妬まれる神 16

1C 偶像に対する思い

2C 世の空しい学問

2B 哲学者との議論 17

1C 死に至る哲学

2C イエスと復活

2A 開かれた戸 19-21

1B 議論する場 19-20

2B 新しいこと 21

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。私たちは今回と次回で、パウロのアテネにおける宣教を見ていきます。16 節からです。おそらく、これまでのパウロの宣教には、距離感を少なからず抱いた私たち日本のクリスチャンは、アテネにおけるパウロのそれには、「そうそう」とうなずく部分が大きくなると思います。それは、ユダヤ人の会堂における宣教ではなく、広場やアレオパゴスにおける、全くの異教、多神教の人々に対する宣教だからです。

1A 心の憤り 16-17

1B 妬まれる神 16

1C 偶像に対する思い

¹⁶ さて、パウロはアテネで二人を待っていたが、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えた。

「二人を待っていた」とあります。パウロがアテネに来たのは意図的ではありませんでした。ベレアにおいて、命が狙われていたので、なんとかシラスとテモテは踏みとどまっていたものの、彼だけがアテネに来たのです。そこで彼らが来るのを待っていました。

その間に、「町が偶像でいっぱいなのを見て」とあります。私たちがギリシャに旅行に行った時、ベレアからバスで、すなわちパウロの海路とは違い、陸路でアテネに向かいました。7時間でしょうか、8時間でしょうか、かなりかかりました。マケドニアではなく、アカイアという地方で、今のギリシャ南部の地域です。

今のギリシャの首都であります、当時、ギリシア世界の中心な都市です。西洋文明の発祥地とも言われています。民主主義がここから生まれ、西洋思想を形作るギリシア哲学もここから生まれます。しかし同時に、日本では古事記にある神々の話が神話としてあります。ギリシャには、「オリピック」の言葉の由来である、「オリンポス山」があり、そこから、オリュンポス十二神という、神々が出て来たと言われていて、ギリシャ神話があります。ゼウス神が多くの神々の中の主神です。十二神の中のアテーナーという女神から、アテネの町の名が始まりました。

アテネに行けば、その首都の中心がパルテノン神殿であることは一目瞭然です。そこに、アテーナーが祀られていました。どこに行っても、中心にそびえるアテネのアクロポリス(城砦)の上に建てられているパルテノン神殿の遺跡を眺めることができます。パウロがここに来た時には既に、その全盛期は終わっていました。最も栄えたのは、紀元前五世紀頃です。ソクラテスやプラトン、またアリストテレスなどの時代です。ローマ時代には、その威光は過ぎ去っていましたが、それでも、哲学や芸術、文学の中心的役割は担っていました。そして、ギリシャ神話に基づく神々は、いたるところで拝まれていました。

そして、「偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えた」とあります。今晚は、この言葉が中心的なテーマです。心に憤りを抱きましたが、それは利己的なものではなく、神から来る熱情であり、神の愛に基づくものです。そして、こうした怒りは、パウロのアテネにおける宣教の原動力となっています。これは、神からのものです。

主は、天地を造られた唯一の神として、ご自分の造られたものによってご自分を現したいと願われています。ところが、その造られたものが神と称し、拝まれていくことに対して、深い熱情を抱かれます。ちょうど、自分の奥さんしかいない自分の家に、他の男の人が入ってきて、寝室にまで入ってきたら、どう感じるのか？ということになります。それで神は、「ねたみの神」とご自身を呼ばれます。「出 34:14 あなたは、ほかの神を拝んではならない。【主】は、その名がねたみであり、ねたみの神であるから。」

それが、主がご自身を証する原動力となっているのです。出エジプト記において、主が、モーセとアロンによって、ファラオとエジプト人に対して、あれだけの災いを下されたのは、「わたし以外に神はおらず、これらの神々以上に、わたしは、はるかに偉大だ」ということを示すためだったのです。ナイル川、かえる、土、天、牛、そしてファラオ自身など、エジプトでは神々とみなされていました。それらが、血になり、人々に害を与え、天は暗くなり、牛は疫病で死に絶え、そしてファラオの長子の死ということによって、それらは神ではない、わたしが神なのだと言明しておられるのです。「出 9:14 今度、わたしは、あなた自身とあなたの家臣と民に、わたしのすべての災害を送る。わたしのような者が地のどこにもいないことを、あなたが知るようになるためである。」

パウロは、偶像がいっぱいなを見て心に憤りを抱きましたが、それで偶像を排斥するというような行動には出ませんでした。むしろ、それが主の抱かれる熱い愛、人々が偶像から立ち返り、ご自身に立ち返るという思いへと昇華されているのです。

主は、イザヤ書において、ご自分には熱情があることを教えておられます。ユダの家に、インマヌエルが生まれる、処女から男の子が生まれることを宣言されました。そして、その子のことを宣言したのは、主の熱心によるのだと言われます。「イザ 9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。今よりとこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。」

そして、長年、バビロン捕囚生活を経たユダヤ人たちに対して、ご自身だけが神であり、ほかにはいないということ、情熱をもって語っておられます。40章以降、ユダヤ人たちをエルサレムに帰還させる約束を語られますが、諸国の神々が、ただの木や石で作られた偶像にしか過ぎず、わたしは国々を秤の上のごみのようにみなされるほど、大きな方であることを明らかにされます。

そして、それを明らかにするために、前もって、まだ生まれてもいないペルシアの王キュロスが来て、ユダヤ人を解放することを宣言されます。他の神々には決してできないことを、前もって告げられることによって、わたしだけなのだと言われ、証されるのです。「イザ 43:10-12 わたしより前に造られた神はなく、わたしより後にも、それはいない。11 わたし、このわたしが【主】であり、ほかにも救い主はいない。12 このわたしが、告げ、救い、聞かせたのだ。あなたがたのうちに、異なる神はいなかった。」

2C 世の空しい学問

そして、アテネが学問の町、哲学の町であることを先に話しました。学問に優れた人々、知的な人々、知識人が、なぜ、木や石にしかすぎないものをあがめているのか？というのは、非常に滑稽ですが、異教の世界ではこれが当たり前です。

預言書において、そのことがどんどん預言されています。エジプトでは学問が発達していました。バビロンでも発達しています。それぞれが、学問をしていても、ただ疲れるだけ、空しいとして、ことごとく起こる事柄について、国々が破壊される危機について、なんら対処ができないことを、前もって神が預言で伝えられています。

エジプトについて、イザヤが預言しました。ナイル川が干上がる預言をしましたが、それに知恵者たちがなす術がなく、国内で対立ばかりが生まれることを預言しています。「19:11-13 ツォアンの首長たちは全く愚か者だ。ファラオの知恵ある助言者たちも愚かなはかりごとをめぐらす。どうして、あなたがたはファラオに向かって「私は知恵ある者の子、昔の王たちの子です」と言えるのか。

12 あなたの知恵ある者たちは、いったいどこにいるのか。彼らがあなたに告げ、知らせればよい。万軍の【主】がエジプトに何を計画されたかを。13 ツォアンの首長たちは愚かになり、メンフィスの首長たちは惑わされた。自分の諸族のかしらたちがエジプトをよろめかせたのだ。」

そして、エジプトの神々への裁きも預言しています。「19:1 見よ。【主】は速い密雲に乗ってエジプトに来られる。エジプトの偽りの神々はその前にわななき、エジプト人の心も真底から萎える。」

そしてバビロンについては、ダニエル書を見れば分かりますように、王たちは知者として、呪法師たちを側近につけていました。それらを無きものにするのを、イザヤは預言します。「47:10-11 あなたは自分の悪に抛り頼み、『私を見ている者はいない』と言う。あなたの知恵と知識、これがあなたを迷わせた。だから、あなたは心の中で言う、『私だけは特別だ。』」11 しかし、わざわざがあなたを見舞う。それを払いのける呪文をあなたは知らない。災難があなたを襲うが、あなたはそれを避けることができない。破滅は知らないうちに、突然あなたにやって来る。」

そして、パウロは、このギリシア・ローマ社会において、創造主を受け容れず、知者だと言いながら愚かになっていることを、ローマ人への手紙で書いています。「ロマ 1:19-21 神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。20 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」

2B 哲学者との議論 17

17 それでパウロは、会堂ではユダヤ人たちや神を敬う人たちと論じ、広場ではそこに居合わせた人たちと毎日論じ合った。

ユダヤ人の会堂、シナゴークにも行き、論じましたが、広場、アゴラでも論じ合いました。これが、いつもとは違う彼の宣教方法です。直接、異邦人たちに語りかけました。アゴラは、市場もあるし、行政もあるし、裁判するところもあります。人々が集う公共の場です。

今も、鮮やかな大きな遺跡が残っています。パルテノン神殿の下にあり、その間に、次に出てくるアレオパゴスがあります。アレオパゴスから見ると、仰ぎ見てパルテノン神殿があつて、反対側を見下ろすとアゴラがあります。

(次のページの写真:アレオパゴスから見たパルテノン神殿)



(アレオパゴスから見おろすアゴラ)



1C 死に至る哲学

¹⁸ エピクロス派とストア派の哲学者たちも何人か、パウロと議論していたが、ある者たちは「このおしゃべりは、何が言いたいのか」と言い、ほかの者たちは「彼は他国の神々の宣伝者のようだ」と言った。パウロが、イエスと復活を宣べ伝えていたからである。

パウロの生きていた時代に、主流となっていたギリシャ哲学は、「**エピクロス派とストア派**」でした。エピクロス派について、グーグルの Gemini に、「中高生でも分かるように、平易で、端的に説明してください」としたら、こういった内容です。

1. 「**快樂**」こそが一番大事

エピクロス派は「**快樂こそが人生の目的だ**」と言いました。でも、これは「毎日パーティーをして贅

沢をしよう！」という意味ではありません。

彼らが考える本当の快樂とは、「体から苦痛がなくなり、心から不安が消えて、穏やかでいること」です。これを専門用語でアタラクシアと呼びます。

2. 「隠れて生きよ」

「お金持ちになりたい」「有名になりたい」という欲求は、手に入らないと苦しいし、手に入れても失うのが怖くなりますよね。

エピクロス派は、そうしたストレスを避けるために、**「政治や出世からは距離を置いて、気の合う仲間と静かに暮らすのが一番幸せだ」**と考えました。

3. 「死」を怖がらなくていい

当時の人々は「死んだらどうなるんだろう？」「神様に罰を当てられるかも」と怖がっていました。しかし、エピクロスはこう教えました。

- 人間は小さな粒(原子)でできている。
- 死ぬときはその粒がバラバラになるだけ。
- 「私」がいるときは「死」はないし、「死」が来たときにはもう「私」はいない。
- だから、死を怖がる必要はまったくない！

まとめると...

エピクロス派の教えは、現代風に言えば**「ミニマリスト」や「スローライフ」**に近いです。

「おいしいパンと水があり、仲の良い友達がいれば、それで十分幸せ。余計な心配はやめて、今を穏やかに楽しもう」

・・・ということです。ちなみに、神については、エピクロス派は、「あまりにも遠くにいる存在で、我々の生活には関わっていない」と考えていました。

それに対してストア派は、すべてに神々がいるという汎神論でした。同じように、Gemini に聞いてみました。

「エピクロス派」が「心地よさを大切にするスローライフ派」なら、今回の**「ストア派」は一言でいうと「メンタル最強派」**です。

現代でもストイック(禁欲的)という言葉の語源になった彼らの教えを、ポイントを絞って解説します。

1. 「自分でコントロールできること」だけに集中する

ストア派の最も大切な教えは、世界を2つに分けて考えることです。

- 自分ではどうにもできないこと： 天気、他人の意見、過去の失敗、病気、死。
- 自分で決められること： 自分の考え方、今の行動、これからどう努力するか。

彼らは「どうにもできないこと」で悩むのは時間のムダだと考えました。「テストの結果(自分では操

作不能)を不安がるより、「今この 1 ページを解く(自分の行動)」に全力を出すのがストア派のスタイルです。

2. 「感情」に振り回されない(アパテイア)

嫌なことがあったとき、怒ったり泣いたりして心が乱れるのは、出来事そのもののせいではなく「これは悪いことだ」と自分が判断したからだと考えました。

何が起きても「ふむ、こういうことが起きたか」と冷静に受け止め、感情に流されない強い心を、専門用語でアパテイアと呼びます。

3. 「自然(運命)」に従って生きる

ストア派は、この世の出来事にはすべて意味があると考えました。

たとえ不運なことが起きても、「これも自然の流れの一部だ」と潔く受け入れ、自分の役割(学生なら勉強、市民なら社会貢献など)を淡々と果たすことを大切にしました。

…ということです。神がここにいるから、人生、なるべく楽に生きようというのがエピクロス派で、なんでも神々がかかわっていて宿命的だから、できることをきちんとしていこうというのが、ストア派ということかな?と思います。

2C イエスと復活

どちらも、日本の社会生活で、人々の考えの中にありますね?けれども、この相対する二つの哲学に共通しているものがあります。それは、「死んだら終わりだ」というものです。ストア派は、死後の世界は一応、認めていますが、意識がなくなるとして、実質、死んだら終わりと考えていました。しかし、福音は違いますね。

そこで語ったのが、「イエスの死者からの復活」です。すべての人は、死んでもいつかよみがえる日がある。イエスが、人の罪のために死なれて、しかしよみがえられた。そして、終わりの日にすべての人がよみがえり、審判を受けることになるという内容です。

彼らには、なんだか訳のわからない話だったのです。「このおしゃべり」と言っていますが、あちこちから教えをつまみ食いをして、それを自分のものであるかのように語っている、安物教師のような意味なのだそうです。そして、イエスと復活を宣べ伝えていたのは、死後の世界がない、あるいはあっても、意識がないとしていたのですから、何を言っているのか?という感じです。さらに、イエスという名を出しているのに、なんだか外国の神のようだぞ、と思っていました。なんか、無宗教だと言っている日本人たちも、似た反応をしますね。

2A 開かれた戸 19-21

1B 議論する場 19-20

しかし主は、ここで福音を語る戸を開いてくださいました。¹⁹ そこで彼らは、パウロをアレオパゴス

に連れて行き、こう言った。「あなたが語っているその新しい教えがどんなものか、知ることができるでしょうか。²⁰ 私たちには耳慣れないことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなことなのか、知りたいのです。」

アテネの人たちは、新しい考えに興味を持ちました。ところで、アレオパゴスは、場所の名前であると同時に、「評議会」という意味も持ちます。かつては評議会として、アテネの議員たち議会だったのですが、それは紀元前五世紀には、多くの権限が剥奪されて民主政となっていました。ただ評議会そのものは、ローマ時代にも残っていました。ここにパウロが連れて来られます。

2B 新しいこと 21

²¹ アテネ人も、そこに滞在する他国人もみな、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。

そうしたことを聞きながら、一日を過ごしていたとあります。ずいぶんと贅沢だなと思いますね。哲学に詳しいある牧師さんが、「哲学というのは、本質は遊びだ」と言っていました。暇つぶしのような遊びだ」と言っていました。ここに出て来る様子と似ています。

そして次回、パウロの説教の内容を読んでいきたいと思います。ここでは、パウロが偶像でいっぱいなのを見て、それで心に憤りを抱きましたが、実はその憤りは、主の愛の中に取り組みされているということです。憤りや怒りは、聖書には人々を滅ぼしてしまう罪として描かれていますが、しかし、主から来る情熱としての怒りは、それを生かすことによって、大きな益をもたらすということが言えると思います。

みなさんの生活の中で、ある不条理なこと、苦しいことなどがあって、それに対する怒りが、実は、良いものをもたらしているということはないでしょうか？主にあって抱いている怒りは、愛とともに人々を突き動かす原動力になるのです。